

プラウトゥス *Trinummus* における道徳的主題について
— 喜劇的效果を上げる *fides* と *amicitia* —

上村 健二

I 道徳的主題をめぐって

プラウトゥスの喜劇『三文銭 (*Trinummus*)』は、一般的に、プラウトゥスらしからぬ道徳的な劇だと言われている⁽¹⁾。つまり、各登場人物が伝統的な道徳、即ち父祖伝来の慣習 (*mores maiorum*, *mores veteres*) を称賛し (これは *mores boni* と言い換えられる)、逆に、最近の風潮 (*mores noui*) を批判する (これは *mores mali* と言い換えられる)。ほとんどの登場人物がこれにかかわっていて⁽²⁾、モラルに関する単語が頻出する (*fides*, *amicitia*, *fiducia*, *uirtus*, etc.)。

それ故、道徳的主題があることは確かであるが、その解釈については様々である。そこで、主として道徳的主題とのかかわりから、従来の批評・研究史を簡単にまとめてみたい。19世紀までは、道徳的であるが故に優れた劇であるという評価が多かったようである⁽³⁾。

20世紀になるとそのような称賛は退潮し、*Trinummus* はあまり研究対象にもされず、無視されたきた感があるが、そうした中で、当時のローマの政治的状況 (カトとスキピオ一族の対立) を反映するという説がある⁽⁴⁾。つまり、父祖の慣習を称賛するということは、プラウトゥスが名指しこそしないがカト側に肩入れしているということだ、という考えである。このような解釈は現在あまり支持されていない。というのも、そもそもローマの喜劇は国家が取り仕切るもので、政治的意見を表明するような場ではなかったからであり、また、最近のモラルの低下を嘆くというのは、この時代に限らず、いつの世にでもあり得ることだからである⁽⁵⁾。

次に、70年代からは*Trinummus*を扱う論考はかなりの数に上るが⁽⁶⁾、そ

の中では、特に Segal の論文に注目したい。Segal は、Trinummus を退屈な劇だと断定した上で⁽⁷⁾ 道徳的テーマの展開を分析し、作者は造営官 (aediles) を喜ばせるために「ためになる」劇を書いたのだと主張する⁽⁸⁾。

(造営官が問題になるのは、この劇の中で aediles という単語が脈絡もなく現れる箇所 (990) があることと、造営官が喜劇を取り仕切って金を出すということからである。) Segal はこの結果この作品は喜劇ではないとさえ言っている⁽⁹⁾。

逆に、道徳的テーマを否定的に見る説もある。まず、Stein⁽¹⁰⁾ は、この劇では表面的には伝統的な道徳が賞賛されているように見えるが、実はそれに反するような要素が認められ、mores maiorum を信奉しているはずの老人たちがそれに反する行動を取っており、道徳的テーマは最後には無視される、と主張する。また、Anderson⁽¹¹⁾ は、プラウトゥスが、登場人物の独善的な言動の空しさを強調するために、第三幕までの道徳論者たちを意図的に退屈なものにした、と考える。

これらの説に対して、私が主張したいのは、Trinummus では伝統的美徳 (特に fides 「信義・信用・忠実さ」と amicitia 「友情」⁽¹²⁾) が称えられるとともに、そうした道徳的テーマが喜劇的效果をも上げているということである。従って、Segal の説に対しては、モラルが賞賛されているという点には賛成するが、そのために喜劇ではなくなっているという点には反対する。一方、道徳的要素が否定的に描かれているという説に対しては、あまり細かく論じる余裕はないが、後に若干の反論を加えたい。

II スタシムスの役割

一般に、喜劇では「誤解」がしばしば重要な意味を持つ⁽¹³⁾ が、この Trinummus の筋もある誤解から始まる。即ち、若者レスボニクスから後見人カリクレスが家を買取ったことをメガロニデスという老人が非難する。つまり、放蕩者の若者に現金を渡すのは墮落の種を与えるだけであり (128-32)、また、後見を頼んでおいた父親カルミデスから帰る家

を奪ったことになる(136-7), というわけである。非難されたカリクレスは家に隠された財宝の秘密を明かすことで誤解を解く。つまり、レスボニクスが宝のことを知らずに家を売りに出したので、カリクレスは宝を人手に渡さぬために自ら家を買取ったのである(149-82)。

ところが、スタシムス(レスボニクスおよびカルミデスの奴隷)もカリクレスを誤解していて、こちらの誤解は劇の終わり近くまで続く。この点、メガロニデスとスタシムスとの対比が認められる。

スタシムスの誤解が初めて示されるのは第二幕の末尾である。即ち、レスボニクスは妹を友人リュシテレスに嫁がせることを決めた後、スタシムスに、妹のいるカリクレスの家に行くよう命じる(577-8)が、スタシムスは「あいつ(601 hic = カリクレス)が我々を追い出して以来、あの家が嫌いだが」(600-1)と言い、カリクレスへの反感を示す。スタシムスは、宝の秘密を知らされていないので、カリクレスの真の意図を知るよしもないのである。

続く第三幕第一場では、スタシムスは、カリクレスとの対話の後、「レスボニクスを家から追い出したからにはあの土地(唯一残っている資産)からも追い出すつもりだ」(616)とカリクレスのことを邪推している。続いて、スタシムスは外国にいる主人カルミデスに呼びかけてその帰国を熱望する(617-9)。その際、「敵に復讐するためと、私には褒美を持ってきてくれるために」(618-9)と言うが、「敵(618 inimicos tuos)」はカリクレスのことと解釈できる。また、ut erga te fui et sum(619)は、自分の昔も今も変わらぬ主人への忠実さをアピールするものと考えられる。さらに、620-1では、「万事まかせておけば枕を高くして寝られるような友人という名に値する友人を見つけるのは至難の業だ」と言う。つまり、スタシムスは、カリクレスのカルミデスに対する友情を疑い、自分のカルミデスに対する忠義と対比させている。

第四幕でも同様の誤解が示される。帰国した主人カルミデスが家に入ろうとすると、スタシムスは、「そこはもううちの屋敷ではない」(1080)とか、「あなたの息子が家を売ってしまった」(1081)などと言ってカルミデスを絶望させる(1081 perii, 1082 occidi, 1086 male

disperii). その中でスタシムスはこれまでと同じ考えを繰り返し、「万事をまかされていたカリクレスが我々を追い出した」(1083-4)と言う。このような誤解に基づく報告で主人を絶望させる場面には、一種の喜劇的効果が感じられる。

その後、カリクレスが登場してカルミデスを安心させる(1093-1102)。誤解は解け、スタシムスも自分の思い違いを悟る(1110-4)。即ち、「あの人は俺の主人の唯一の忠実な友(amicus solus firmus)だった」(1110)とか、「あの人だけは信義を(fidem)守っているらしい」(1113)などと言う。ここでスタシムスは退場し、二度と現れない。つまり、スタシムスは、思い違いをを認識したことでその役割を終えたとも解釈できるのである⁽¹⁴⁾。

このように、スタシムスにはカリクレスのカルミデスに対する信義(fides)と友情(amicitia)を誤解するという役割があり、それが喜劇的効果を上げている。そこで、スタシムスが登場する他の滑稽な場面にも、fidesやamicitiaが関連しているという可能性が考えられる。以下で、この劇の見せ場とも言うべき三つの場面を検討するが、そのうち二つはスタシムスが演ずる場面であり、残りの一つは、スタシムスは登場しないものの、この劇で最も優れた場面とされる⁽¹⁵⁾ペテン師の場面である。

Ⅲ スタシムスとピルトの対話

第二幕第二場で、レスボニクスの友人リュシテレスは、レスボニクスを窮境から救ってやる方法として、その妹を持参金なしで嫁にもらおうと考え、父親ピルトにそれを申し出る(374-5)。ピルトはためらうが、結局は同意する(382-4)。さらに第四場では、ピルトは息子に代わってレスボニクスの所へ申し込みに来る。レスボニクスは、妹を嫁にやること自体には結局同意するが、持参金なしでという条件を承知せず、唯一の資産である郊外の土地(農場)を持参金にするといい張る(505-10)。そこで奴隷スタシムスは、何とかしてピルトに土地を受け取らせないようにと、大げさな作り話をする(523-54)。この

場面は Trinummus の中では数少ない楽しい見所の一つとして認められている⁽¹⁶⁾。以下でこの場面と fides との関連を考察する。

スタシムスとピルトの対話の間に、レスボニクスの傍白がわずかに挟まっている (527-8)。

consuadet homini, credo. etsi scelestus est,

at mi infidelis non est.

あいつ、説得してるらしいな。悪党だが、

この僕には忠実な奴だ。

このせりふのポイントの一つは、レスボニクスの勘違いである。即ち、レスボニクスは、スタシムスが主人の意向に従って、ピルトが土地を受け取るように説得していると思っている⁽¹⁷⁾。しかし、実際には、スタシムスの行動は逆であり、その土地があたかも災いの巣窟であるかのように描写し、その上、レスボニクスが何とかその土地を厄介払いしたがつている (557-8) などと述べる。つまり、スタシムスは、主人の意志に従うどころか、言わば主人をだしにしてほら話をでっち上げているのである。ここにもある種の喜劇的效果がある⁽¹⁸⁾。

さて、スタシムスは主人の意向に従っていないのであるが、スタシムスとしては主人のためを思って行動しているとも言える。この農場を失えば収入源が何もなくなってしまう (512-4, 561) からである。つまり、この行動は忠誠心の現れであるとも解釈できる。この点は既に検討した箇所 (第三幕第一場) によって裏付けられる。即ち、615 行以下でスタシムスは、カリクレスが土地を手放させようとしている — これは誤解であるが — ことと、自分の忠誠心とを対比させている。そこで、スタシムスは忠誠心から行動していることになるが、そのやり方は的外れである。なぜなら、元々持参金を受け取る気がない (499, 511) 相手に、土地を受け取らないようにと説得しているからである。つまり、この場面は、スタシムスの忠義・忠誠心 (fides) が的外れな方向に発揮されている場面だということになる。

また、相手のピルトは、スタシムスの度を越した作り話を真に受けているわけではなく⁽¹⁹⁾、適当にあしらっているだけだと考えられるが、そのせりふの中には道徳的テーマが入り込んでいる。即ち、スタシムスが「よそでは大豊作って時に、そこでは種蒔きした分の三分の一も取れない」(529-30)と言うと、ピルトは「ほほう。種蒔きすると退治できるんなら、悪習を(mores malos)種蒔きするとちょうどいいな」(531-2)と応じるのである。

以上から、この滑稽な場面にも道徳的テーマがかかわっており、fidesが喜劇的効果を上げていることがわかる。

IV 奴隸スタシムスの道徳論

第四幕第三場では、奴隸スタシムスが走りながら登場し(servus currensの場面と呼ばれる⁽²⁰⁾)、そのせりふを、既に帰国した主人カルミデスが立ち聞きする。スタシムスのモノローグは、途中で突然調子を変え、moresについての道徳論となる(1028ff.)。ここでは、よい慣習(mores boni)が称賛され悪い慣習(mores mali)批判されるという、この劇でのパターンがまたもや繰り返される。しかし、ここでの道徳的テーマは明らかに喜劇的効果を上げている。そもそも、酒に酔った(1013-9)奴隸が天下国家を論じ(1030 basilica … facinora … loqui)、国を憂える(1057 rebus curem puplicis)というのは滑稽な状況である。その主張には、まじめな主張らしきものもあるが、ふまじめなものもある。例えば、1039-40行は、喜劇的効果をねらったものである。

vae miserae etiam ad parietem sunt fixae clavis ferreis,
ubi malos mores adfigi nimio fuerat aequius.

哀れなことに法律は鉄の釘で壁に張り付けられちまってる。
悪習を磔^{はりつけ}にする方がずっとふさわしかったのにな。

つまり、法律(1039 vae = leges)が張り付けられているのは単に掲示し

であるというだけで⁽²¹⁾、法律が虐待されているわけではないのに、これを磔の刑罰と同列に扱っているのである。

さらに、スタシムスがこのようなことを考えた原因は、友人に裏切られたことにある(1050-6)。スタシムスは、友人に金を貸してやったが請求しても返してもらえなかったと言う。ここでは友情と信義は尊重されず⁽²²⁾、スタシムスには、主人カルミデスとは逆に、友人に裏切られるという役割も与えられているわけである。

このように、この場面は道徳的主題を戯画化したものであり、まじめな道徳論のパロディーだと言える。つまり、*fides* と *amicitia* をはじめとする道徳的主題は喜劇的效果を上げるために利用されているのである。

V ペテン師⁽²³⁾の場面

第四幕第二場で、老人カリクレスとメガロニデスの相談(第三幕第三場)の結果雇われたペテン師が、外国にいるはずのカルミデスからの使いの者という役を演ずる。ところが、ちょうどそこにカルミデスが帰国していて(第四幕第一場)、ペテン師は、目の前にいるのがカルミデス本人だと知らずに、カルミデスから手紙と金を預かってきたと話す。人をだましに来たはずのペテン師が老人カルミデスによってかえって愚弄される(cf. 896, 900, 958-9)。

このような滑稽な状況は誰の目にも明白であり、この場面は、かつてはローマ喜劇の中で最もおもしろい場面の一つだと言われたほどである⁽²⁴⁾。Segalのようなこの作品を評価しない人でも、この場面はこの劇の唯一の喜劇的場面だと認めている⁽²⁵⁾。しかし、この場面と *fides* および *amicitia* との関連(特にその喜劇的效果)が指摘されたことはないようである。以下でこの点を検討する。

ペテン師は手紙と金を預かってきたという触れ込みになっている(848-9, 894-5, 898-9, 955-6)が、何かを預けるということは信頼関係を前提とする。そこでペテン師は、自分が手紙を預けた人と親しい間柄⁽²⁶⁾であり、信用されている、と主張している(895, 905-6, 952-7)。ところが、親しいは

ずの人の名前を忘れてしまうという形で滑稽な場面が展開されるのである。

まず、879 行以下に、ペテン師の名前をめぐるやりとりがある。この中でペテン師は、ふだん使っている名前は Pax だと言う (889-90)。これを聞いたカルミデスは「まるで、おまえさんに何か預けたら、たちまち『ぱっ (pax)』と消えてしまうって、そう言ってるようなもんだ」(891) と応じる。ペテン師は手紙を預かっていることになっているので、このせりふにはペテン師の信用 (fides) に対する疑いが暗示されているように思われる。

その後、ペテン師は、レスボニクスの父親が手紙を渡したのだが、それが自分の友人だ、と言う (894-5, is = pater)。父親というのは無論、カルミデス自身である。つまり、ペテン師はカルミデスとの友人関係 (amicitia) を主張するが、これは実際には存在しない、偽りの、架空の amicitia である。しかしカルミデスはすぐには正体を明かさず、ペテン師からさらに話を聞き出そうとする (896ff.)。つまり、以下の対話は、架空の amicitia に基づくやりとりになる。

906 行で、カルミデスはペテン師に、手紙を渡した人の名前を尋ねるが、ペテン師はそれを (即ち、カルミデスという名を) 忘れてしまう⁽²⁷⁾。困ったペテン師は「その名をうっかり飲み込んでしまった」(908) と言い、カルミデスは「親しい人を (amicos) 歯の内側に閉じこめるのはいかな」(909) と応じる。その後も滑稽な対話が続く (ペテン師は名前を思い出せずにいらだつ)、ようやく922 行でカルミデスという名が現れる。

Sy. ad hoc exemplum est— Ch. an Chares? an Charmides?⁽²⁸⁾

Sy. enim Charmides.

em istic erit. qui istum di perdant! Ch. dixi ego jam dudum tibi :
te potius bene dicere aequomst homoni amico quam male.

Sy. satin inter labra atque dentes latuit uir minimi preti?

Ch. ne male loquere apsentu amico. Sy. quid ergo ille ignauissimus
mihi latitabat? Ch. si appellasses, respondisset, nomine.

ペテン師 こんな名前だがね——

カルミデス カレスか、それともカルミデスカ。

ペテン師 それぞれ、カルミデスだ。

そいつだぜ。くそっ、そんな野郎、くたばっちまえ。

カルミデス さっきも言ったことだがな、

親しい人なら、けなすよりほめるべきだろうが。

ペテン師 そのろくでなしが唇と歯の間に隠れてやがったのにかい。

カルミデス 友達の陰口をたたくのはよせ。

ペテン師 じゃあなんであの馬鹿野郎は隠れようとしやがったんだ。

カルミデス 名前で呼びかければ、答えただろうよ。(922-7)

ここで、ペテン師は癩癩を起こし、友人であるはずの（また、この場にはいないはずの）カルミデスに対して悪口雑言を浴びせている。これに対してカルミデスは「友人の悪口を言うな」（924, 926）と応じている。

さて、ペテン師の場面全体のポイントは、人をだましに来たはずのペテン師が逆に愚弄されるということであるが、この箇所ではもうひとひねり加わっている。つまり、ペテン師はカルミデスをののしっているのに、カルミデスの方はまだ正体を明かしたくないので、正面切って咎めることができず、もって回った言い方をせざるを得ないのである。ここにおかしみが生ずるのであり、架空の友人関係、架空のamicitiaが喜劇的効果を上げているのである。

VI 道徳的主題を否定的に見る説について

次に、道徳的主題を否定的に見る説について若干の反論を述べる。Steinは、第一幕第二場でカリクレスがメガロニデスに宝の秘密を明かすのは信義に反すると主張する⁽²⁹⁾。この解釈が当たっていないことは、153-5行のカリクレスのせりふから明らかであろう。カルミデスがカリクレスに、他に誰もいない時に友情と信義にかけて涙ながらに頼んだの

は「その秘密 (153, 155 id) を息子にも、息子に秘密を漏らすようなどんな人にも打ち明けないように」ということである。

つまり、この主旨は宝の秘密を息子に知られてはならないということであり、口の堅い信用の置ける人物になら打ち明けても差し支えないはずである。だからこそ、メガロニデスには秘密を話して誤解を解き、一方レスボニクスの奴隷スタシムスは秘密を知らされずにいつまでも誤解するという成りゆきになるわけである⁽³⁰⁾。

他方、Anderson は、カリクレスとメガロニデスが相談して（第三幕第三場）ペテン師を雇うのは愚かなことだと述べている⁽³¹⁾。ペテン師を雇う目的は、宝の中から取り出す金を外国のカルミデスが送ってきた金だと見せかけることである (771-82)。これも宝の秘密をレスボニクスに気づかせないために他ならず、レスボニクスが宝の存在を知ればそれを食いつぶしてしまうだろうとカリクレスらは危惧している (750-3)。ところが、Anderson は、レスボニクスに宝の秘密を教えてもよいはずだと言う。なぜかと言えば、レスボニクスは、妹に何としても持参金をつけてやろうと考えており、もはや放蕩息子ではないからだ、というわけである。従って、メガロニデスは以前に噂を信じてカリクレスのことを誤解したのと同様に、ここでも人を見る目がないと、Anderson は言う⁽³²⁾。

この解釈も当たっていない。第一に、前述のように、父親カルミデスが息子には秘密を打ち明けるなど頼んだからには、それに従う義務があるからである。第二に、レスボニクスが悪人ではないことは本当だが、だからといって財産の扱いが杜撰であるという点に変わりはない。レスボニクスは家売って得た金のうちかなりの部分を友人の借金の肩代わりに使っていて (425-30)、悪人ではないが金の使い方が無茶だというふうに描かれている。そこで、持参金についても同じことが言えると考えられる。つまり、自分が無一文になってしまうのに無理に土地を手放そうとするのは、善人ではあっても財産の扱いが杜撰だという描き方の一環として解釈すべきなのである⁽³³⁾。

総じて、喜劇的にせんがために⁽³⁴⁾ 道徳的主題をぶちこわす必要はない。一方ではおおまじめに伝統的道徳が称えられるからこそ、別の場面

ではそれとの落差から、道徳的主題におかしみが生ずるのである。

Ⅶ 結論

これらの考察から、次のような結論が得られる。Trinummusには確かに道徳的主題があり、伝統的美徳（特に fides と amicitia）が称賛されている。しかし、これは喜劇的効果を上げる役割をも果たしている。つまり、カルミデスに対するカリクレスの信義と友情のような、本物の fides や amicitia が称賛される（1125-6）一方で、それと対比される形で、奴隷スタシムスの的外れの忠誠心やペテン師の主張する架空の友人関係などが笑いを生み出しているのである。

注

本稿で引用・言及された文献は次の通りである。

Anderson : W. S. Anderson, *Plautus' Trinummus : The Absurdity of Officious Morality*, *Traditio* 35(1979), 333-45.

Bain : D. Bain, *Actors and Audience*, Oxford 1977.

Brix-Niemeyer : J. Brix - O. Niemeyer, *Ausgewählte Komödien des T. Maccius Plautus*, Leipzig-Berlin 1907⁵.

Brotherton : B. Brotherton, *The Vocabulary of Intrigue in Roman Comedy*, *Menasha* 1978(1926).

Csapo : E. Csapo, *Plautine Elements in the Running-Slave Entrance Monologues?*, *CQ* 39(1989), 148-63.

Dieterle : A. Dieterle, *Die Strukturelemente der Intrige in der griechisch-römischen Komödie*, Amsterdam 1980.

Duckworth : G. E. Duckworth, *The Nature of Roman Comedy*, Princeton 1952.

Ernout : A. Ernout, *Plaute. Comédies. Tome VII*, Paris 1961.

- Fantham : E. Fantham, *Philemon's Thesauros as a Dramatisation of Peripatetic Ethics*, *Hermes* 105(1977), 406-21.
- Frank : T. Frank, *Some Political Allusions in Plautus' Trinummus*, *AJP* 53 (1932), 152-6.
- Gratwick : A. S. Gratwick, *Curculio's Last Bow: Plautus, Trinummus IV. 3*, *Mnemosyne* 34(1981), 331-50.
- Grimal : P. Grimal, *L'Amour à Rome*, Paris 1979(1963).
- Hunter : R. Hunter, *Philemon, Plautus and the Trinummus*, *Mus. Helv.* 37(1980), 216-30.
- Lofberg : J. O. Lofberg, *The Sycophant-Parasite*, *CP* 15(1920), 61-72.
- Muecke : F. Muecke, *Names and Players: The Sycophant Scene of the "Trinummus" (Trin. 4.2)*, *TAPA* 115(1985), 167-86.
- Rosivach : V. J. Rosivach, *Plautine Stage Settings*, *TAPA* 101(1970), 445-61.
- Segal : E. Segal, *The Purpose of the Trinummus*, *AJP* 95(1974), 252-64.
- Slater : N. W. Slater, *The Dates of Plautus' Curculio and Trinummus Reconsidered*, *AJP* 108(1987), 264-9.
- Stein : J. P. Stein, *Morality in Plautus' Trinummus*, *CB* 47(1970), 7-13.
- Taladoire : B. A. Taladoire, *Essai sur le comique de Plaute*, Monaco 1956.
- Webster : T. B. L. Webster, *Studies in Later Greek Comedy*, Manchester 1953.
- Zagagi : N. Zagagi, *Tradition and Originality in Plautus*, Göttingen 1980.

- (1) 例えば, Duckworth, 144-5, Fantham, 406-7, Webster, 136.
- (2) 顕著な例としては, 第一幕ではメガロニデスのモノローグ (23-38), 第二幕ではリュシテレスのモノローグの末尾 (273-6), リュシテレスに対するピルトの説教 (280-300), 第三幕ではリュシテレスとレスボニクスの口論 (627-704), 第四幕ではスタシムスのモノローグ (1028-58), 第五幕ではカルミデスとカリクレスの対話 (1125-9) などがある.
- (3) Anderson, 333.

- (4) Frank, 156.
- (5) Segal, 260-4, Slater, 268-9. ただし, Slater の論文は Gratwick が主張するテキストの読み換え (1016 gurgulio → Curculio) を前提にしている. この読みには反論もあり (Csapo, 160-3), 本稿では Gratwick の読みを採用してはいない.
- (6) ただし, 研究者の関心は現存しないピレモンの原作 Thesauros との関連に傾斜している (Anderson, Fantham, Hunter, Muecke, Zagagi) .
- (7) Segal, 252. Cf. Slater, 267.
- (8) Segal, 261-2.
- (9) Segal, 264.
- (10) Stein, 7-13 (特に 12) .
- (11) Anderson, 341.
- (12) fides と amicitia の重要性については, cf. Segal, 259-64, Hunter, 219, 227.
- (13) Duckworth, 140-2.
- (14) スタシムスは港へ行くようカルミデスに命じられて (1102-8) 退場するのだが, この用事自体は筋の展開に無関係である. ただし, スタシムスは港へ行く途中でリュシテレスにカルミデスの帰国を教えるということになっている (1120-1) . Cf. Rosivach, 460.
- (15) Brix-Niemeyer, 28.
- (16) Duckworth, 145, Webster, 135.
- (17) Brix-Niemeyer, ad 527, Ernout, 46.
- (18) Bain, 166-8.
- (19) Dieterle, 164.
- (20) Cf. Csapo, 148-63.
- (21) Brix-Niemeyer, ad 1039.
- (22) fides および amicus という単語が繰り返し使われる (1048, 1052, 1054, 1056) .
- (23) sycophanta の便宜的な訳であるが, この語はラテン語ではギリ

シア語においてよりもずっと広い意味で用いられる。 Cf. Brotherton, 112-4.

(24) Lofberg, 65-6.

(25) Segal, 263-4. 一方、あまり評価しない例としては Taladoire, 149 がある。

(26) Cf. Dieterle, 165.

(27) 無論、名前を忘れるというのはよくある喜劇的要素である。 Cf. Muecke, 181.

(28) 922-3 行の読みには定かでない点があるが、ここでは、O. C. T. (W. M. Lindsay, ed., 1903) に従わず、部分的に Leo 版 (F. Leo, ed. Berlin, 1895-6) を採用している。この変更については、cf. Muecke, 182.

(29) Stein, 8.

(30) もちろん、秘密を打ち明けることは筋の展開には不可欠である (Fantham, 411-2)。また、メガロニデスが非難を始めてから (68) カリクレスが実際に秘密を明かす (149ff.) までにはかなりの間があり、カリクレスの言動が安易すぎるとは言えないであろう。

(31) Anderson, 344.

(32) Anderson, 342-4.

(33) Webster, 137 は「レスボニクスの気前のよさは放蕩者の愚かな気前のよさである」と言う。また、最後の場面で父親カルミデスが罰としてレスボニクスを結婚させる (1183-5) のは、レスボニクスが相変わらず愚かな息子だからであろう。 Cf. Grimal, 103.

(34) Stein, 12.